
三国志 【豊臣の血は消えず】

クラウス・リッター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三国志 【豊臣の血は消えず】

【Nコード】

N3703G

【作者名】

クラウス・リッター

【あらすじ】

慶長20年、天下統一を成し遂げた豊臣氏は、徳川氏によって滅ぼされた。だが、彼等は天に召されずに再び大地を踏む。そこは後漢の時代の中国。彼等が三国時代の英傑達と出会う時、歴史は新たな方角へと歩みを進み始める。

第1話 豊臣の終焉（前書き）

クラウドと言います。これからよろしくお願いいたします。

第1話 豊臣の終焉

慶長20年（1615年）、大坂・・・

ここで戦国最後の戦と呼ばれる戦が行われ、いよいよその合戦は大詰めを迎えていた。

攻める徳川、守る豊臣。

それは、天下を統一して一時代を築いた豊臣の最後を物語る戦であった。

『秀頼様・・・』

小さく呟いたその男性は、前年に追放された片桐且元に代わって家老となり、豊臣を主導する立場にあった大野治長である。

『よいのだ、修理。豊臣の時代はもう終わりなのだ・・・』

そう答えたのは、23歳の若さながら、現豊臣家の当主である豊臣秀頼である。

『今思えば、私が意思を持たなかったが故に、母上様がこの豊臣の舵を取ったのが・・・』

『秀頼様っ、いけませんっ!!』

慌てて言葉をつなぐ治長。

その治長の脳裏には、今秀頼が言った母上様――淀殿――を止められなかった後悔と自責の念が漂っていた。

『修理よ、天主に火を放て。もはやこれまでだっ』

覚悟を決めた秀頼の目線の先に、頷いて準備を始める治長が映った。

『秀頼様．．．私も御供いたしとう御座います』

消え去りそうな華麗な声を秀頼にかけたのは、秀頼の妻である千姫であつた。

『私は秀頼様と離れとう御座いませぬ。お許しを．．．』

『千．．．すまない、こんな目に遭わせてしまい本当にすまない』

あたりに煙が充満してきた。

火の手があがり、秀頼と千の二人がいる場にも、猛然と火が向かってきた。

この時二人は誓った。来世でも必ず二人で一緒に生きていこうと．．

『大坂城に火の手がつ』

『どうやらこの戦はもう終局に向かっていているようだな真田殿』

『どうやらその様ですな．．．全頭殿』

小高い丘の上で、一時の休息をとっていた二人の武将が口を開いた。

『基次殿も討ち死にし、毛利殿や盛親殿（長宗我部 盛親）の行方
も知れぬ』

『宗茂殿は．．．』

『つい先ほど知らせがあつた。秀忠公に一突きして果てたそうだ』

『剛勇鎮西一の勇将も逝つたか』

静かに呟いた真田信繁―幸村―はつい先ほどまで共に轡を並べ
て戦っていた友に思いえを馳せていた。

『我ら二人、どうやら死に遅れたようだな』

そう言った明石全頭の顔は、生者の顔には程遠い様子であつた。

いくつもの刀傷や鉄砲の弾を喰らって、血が流れすぎたのである。

傍にいた幸村もにたような状態であつた。

すると突然辺りが騒がしくなってきた。

『いたぞっ！豊臣の生き残りだっ！！』

『全員仕留めろっ！褒美がたらふく貰えるぞ』

落ち武者狩をしていた雑兵達であつた。

『真田殿はこれからどうするのですか！？』

『狸（家康）に一突きしてこようかと．．．』

『面白い。私も手伝わせていただこう』

『では．．．参りますか？』

『もちろんだ真田殿
っ！！』

言うなり二人は手に槍を持ち、雑兵を打ち倒しながら家康の元へ向かった。

せめて一矢報いんがため．．．

この大坂の役で、豊臣は滅んだ。

数多くの武将も死んだ。

豊臣家当主豊臣秀頼、浪人六人衆と呼ばれた真田信繁（幸村）、明

石全頭、毛利勝永、長宗我部盛親、後藤基次、立花宗茂

徳川方にも多くの戦死者をもたらしたこの戦の後に豊臣の時代は終わり、徳川の時代となった。

死者は天へと召され、そして消えた。

．．．筈だった。

この物語は、ここから始まる。

場所は中国、河北省【たく】県。

一人の青年が彼等と会った時、歴史は大きく動く。

死して天に召される筈だった豊臣の将は、新たな生を与えられ、今再び大地に立ち上がった。

第1話 豊臣の終焉（後書き）

ご意見・ご感想等よろしく願いたします。

第2話 劉備と秀頼（前書き）

注：この世界の歴史は、史実通りには進みませんので、その所よろしく願います。

第2話 劉備と秀頼

河北省【たく】県のある村に一人の青年がいた。

その青年の名は、劉備。

前漢の景帝の第8子、中山靖王劉勝の末裔である。

劉備は、その日家の近くにある小川まで水を汲みに出かけていた。

『ふう。丸桶いっぱいまで汲んだから、これで十分だろ』

そう言うなり水をいっぱいまで張った丸桶を抱えて、家に帰ろうとした。すると・・・

『兄者っ！言つて下されば我々が代わりに運びますぞ』

『そつだよ劉兄い！関兄いが運んでくれるよぉ』

遅れてやってきたこの二人。

最初に声を掛けてきた方が関羽、次に声を掛けてきたのが張飛である。

『兄者、代わりますぞ』

言うなり劉備がやっと抱えていた丸桶を楽々と抱える関羽を見て、

劉備は苦笑するしかなかった。

『それじゃあお願いしようかな?』

『うむっ！任せてくれ』

『にはは〜』

辺りに張飛の笑い声が響いた時、突然天にも届くような一筋の光が現れた。

『なっ、なんだっ!?』

『光が．．．』

二人が疑問に思っている所、

『行ってみるか?』

『兄者っ?何を言っておるのですか!』

『そうだよ。危険だよ劉兄い』

二人は必死に反論するが、

『二人がいれば大丈夫だろ』

．．．と言っなり光が光った方へ歩きだした。

『待ってよ、劉兄い〜』

一方光の光った先には・・・

『うつ、うつ・・・』

『うつ、ここはいつたいどこだ？』

そこには、立派な甲冑と一振りの刀を身に着けた一人の青年と、まだ若いながらも誰もが目を惹かれそうな綺麗な女性が倒れていた。

『千つ、千つ！』

軽く揺さぶって声を掛けるが、しかし反応はなかった。

もつとも、呼吸はしている為、死んだ訳ではないらしい。

それに安心した青年・・・豊臣秀頼は、改めて辺りの様子を注意深く見回した。

『おかしい。私は千と一緒に、城の天守で・・・。ここはどこなのだ？ここが天の国なのか？』

どうやら未だに現状を理解できていない様子である。

まあ無理もない。

自分が死んだと思ったら、実は過去の中国（しかも後漢末期）に転生したと言われて、納得する筈もないし、できる筈もない。

．．．おや。

どうやら劉備達がやってきたようである。

『っ！？そこにいるのは誰だっ？』

そういつて秀頼は、腰の刀に手を伸ばす。

そして、その声を聞いて二人に気づいた劉備達は、慌ててその声のした方を見た。

関羽が目凝らして二人のいる方を凝視すると、どうやら二人いて、一人は男性、もう一人が女性である事が確認できた。

しかし男の方が腰にある剣のような物に、手を伸ばしている事に気づき、水が入った丸桶を捨てて、自分も剣に手を掛けた。
次の瞬間には、二人は激突していた。

ガキーン

もつとも、火花の散るような刀と剣のぶつかり合い。

もつとも、決着はあっという間についた。

いまだ一度も実践を戦った事のない、人を斬った事のない秀頼にとって、初めての相手が、『あの』関羽では相手が悪すぎた。

力に押され、あっという間に刀を弾き飛ばされた。

『ふむ。筋はいい。だが如何せん経験が浅すぎる』

戦っている最中にも係わらず、相手の力量を分析している関羽。

それほどまでに、二人の力量は離れていた。

『関羽っ、もうよい』

とつさに声を掛けたのは、劉備であつた。

『我が弟が無礼を働いたこと、お詫びする。申し訳ない』

そう言つて劉備は、秀頼に頭を下げた。

それに続いて関羽も剣を収め、秀頼に詫びた。

『先ほどは申し訳なかつた』

『いや・・・こちらこそすまないと思つている』

そう言つて秀頼も詫びた。

『ねえお兄さん、その人は大丈夫なの？』

いきなり張飛が聞いてきた。

『千の事か？どうやら眠っているだけのようだから、大丈夫だと思
う』

『なら良かった』

張飛が無邪気な笑顔を振りまき、それにつられて残りの者達にも自然と笑みがこぼれた。

『よければあなた方御二人を家に招待したいのですが．．．如何かな？』

『本当ですか？それは助かります』

『じゃあ劉兄いゝ、私先に帰ってお母様にその事伝えて来るねえ』
言つなり張飛は目にも止まらぬ速さで、劉備の家に向かって駆け出していった。

その姿を見て、また笑みを浮かべる一同。

そしてゆつくりと劉備の家に向かって歩き出す。

その後ろを見つめている影がいる事を彼等は知らなかった。

時が、動き始めた

第2話 劉備と秀頼（後書き）

さて．．．この物語では、多数の戦国武将を、三国志の時代に登場させます。例を挙げるなら、真田信繁（幸村）、後藤基次（又兵衛）、立花宗茂 e t c . . . などなど。もし読者の皆様が、この戦国武将に登場して欲しいという人が居られましたら、是非感想の方にお書き下さい。お願いいたします。それでは。

第3話 劉備宅にて（前書き）

遅くなって申し訳ありません。なにぶん引越しの準備で忙しく、中々執筆が進みませんでした。謝罪いたします。なお、現在も引き続き登場を希望する戦国武将を募集中です。もし、この戦国武将、あるいは人物に登場して欲しいひとがおられましたら、観想にお書き下さい。それでは本編スタートです。

第3話 劉備宅にて

ここは河北省【たく】県のとある場所にある町の一角、劉備の自宅。さほど大きくはない部屋に三人の男性と三人の女性がいた。

そのうちの女性の一人、千姫はまだ目が覚めておらず、眠っていた。

そこで、彼等を出迎えたこの家の主である劉備の母と張飛の二人に任せ、残りの三人・・・劉備、関羽、秀頼の三人は居間に移動し、部屋の真ん中にあるテーブルに向かい合う形で置いてある椅子に腰掛け、改めて自己紹介・状況の確認などを話した。

そこで得られたモノは、秀頼にとってとても衝撃的な事であった。

まず目の前にいる二人が、『あの』三国志に登場する桃園の三傑と言われる劉備と関羽として、腰を抜かしかけ、更にこの時代が後漢の時代であると知って、その驚きに拍車が掛かった。

もつとも、何故か秀頼は、この時代が後漢の時代である事よりも、目の前にいる三国志の英雄に出会えた事の方が衝撃が大きかったのは、別の話である。

さて・・・そうこうしている間に時間は過ぎていった。気づいたらすっかり日が暮れていた。

途中から張飛が話に加わり、この時代の話や秀頼・千姫が生きていた時代についての話をした。

『へええ、じゃあ秀ちゃんや千ちゃんが生きてた時代は、私達がいる時代よりずっと後の時代なんだねえ』

たいして驚く様子もなくさらっと話を進める張飛に、秀頼は苦笑するしかなかった。

『あつ、千ちゃんっ！目が覚めたんだねっ！？』

張飛の一言により、そこにいた全員が部屋の入り口に立っている女性の方に顔を向けた。

『この度は、大変ご迷惑をお掛けして、本当に申し訳御座いません』
言うなり千姫は、深く頭を垂れた。

『千っ！体の方は大丈夫なのか？気分は悪くないか？』

秀頼が心配そうに聞くが、

『秀頼様、ご心配をお掛けしました。ですが千は、もう大丈夫で御座います』

ニツ、っと笑う千姫の様子に、ようやく安堵の顔を浮べ、改めて劉備達一同に千の事を紹介した。

『紹介が遅れました。私の妻の千です』

『千と申します。ご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした』

丁寧な様子で謝る千姫に、劉備と関羽の二人が見とれていた。

その後、千姫を含めて夕食をとり、今後をどうするかについて話し合いが行われた。

『では暫く我々二人をここに住まわせて下さるのですか！？』

秀頼が疑問を投げかけると、

『さすがにこの家は、6人も住むのには多すぎます。しかし、この家の裏に一軒の空き家があります。その主人は現在都の洛陽に出かけていて、自由に使ってよいと言われていますので、そちらに住んでもらう事になりますが．．．如何でしょうか？』

この申し出に断る理由が、秀頼と千姫の二人には無かった。

何せこのままでは野宿をする羽目になるからだ。

『ただ、その代わりに幾つかの条件があります』

関羽が言葉を繋げた。

その顔には、若干申し訳なさそうな表情が見て取れた。

『秀頼殿には、兄者と私と共に幾つかの力仕事をしていただきたい。また、千姫殿にも張飛と共に働いて欲しい仕事があるのです』

関羽が続けた内容．．．それはつまり

「家を貸す代わりに働け」と言っているのであった。

『もちろん。家一軒借りるのですから、当然です。ただ．．．いつ

たいどんな仕事をするのですか!？」

その質問に劉備と張飛が答えた。

『秀頼殿は我々と共に、友人の馬商人の護衛です。もともと、ただの馬商人ではなく、他にも色々運んだりしていますが．．．』

『千ちゃんは私と一緒にその人の家で、劉兄い達が守って運んできたモノを、売る仕事をするのだあ』

『なる程。ですが．．．そうなるとその商隊の護衛となれば、それを襲う夜盗などに襲われる危険もある。しかし私は刀の扱いになれていない．．．』

『私も商いについては、やった事がないのですが．．．』
まあ当然であろう。

何せ二人は、『あの』豊臣家の主である秀頼と、その妻の千姫である。

戦国時代．．．いやそれより以前の時代から、高い身分（役職や公的立場の強い人間）は自分で身の回りの仕事をする人は少ない。

それは戦国～江戸時代の大名も同じである。

普通、高位の位にいる者が身の回りの家事や子育てを自分で全て行うという事はない。

想像してみてほしい。天下人である豊臣秀吉が、居城の大阪城で、自分で食事を作るだろうか？

はたまた秀吉の正妻である北政所や、側室の1人であった淀君が自分で衣装の洗濯をしただろうか？

勿論、全てがそうとは言い切れない。しかし、普通に考えて大名クラスの立場にいる人間が、このような事はしない。

まして秀頼はその天下人の後継者。その妻の千姫は、徳川家から嫁いできた秀頼の正妻である。

『剣の扱い方などは、関羽が教えてくれますよ』

そんな秀頼の不安な心情を察したのか、劉備が言葉をつないだ。

『関羽に手ほどきを受ければ、多分・・・秀頼殿ならすぐに上達するでしょう』

『うむ・・・先ほどの剣捌きも、荒いながらも筋は良かった。恐らく人並み以上に剣を扱えるようになるでしょう』

につこりと笑って話した関羽の言葉に、秀頼の顔から不安気な表情は消えた。

『千ちゃんも安心するのだあゝ。私が、一から教えてあげるのだあゝ』

この張飛の無邪気な笑みには、さすがの千姫も笑うしかないらしく、

『では張飛ちゃん、明日からよろしくお願いいたします』

『うん。まかせるのだあゝ』

と言ってお互いわらっていた。

大坂城で命を落としたと思いきや、いきなり過去の後漢王朝末期の

時代に飛ばされ、ここで生きてゆく事になった・・・

『人の運命とは、分からぬものよ』

後に秀頼は、回顧録でこの様に語った。

もつとも、この平穏な平和が破られるのは時間の問題であった。

黄巾を身に付けし民衆が、漢王朝に対し牙をむける。

戦国乱世が・・・始まるうとしていた。

第3話 劉備宅にて（後書き）

如何でしたでしょうか？次回はついに黄巾を身につけし者たちの戦いを劉備の決断、そしてあの方のご登場です。ではまた次回、お楽しみに。

第4話 黄巾の乱と劉備の決意（前書き）

どうも、クラウドです。いよいよ劉備達が出発します。天下の為に立ち上がる劉備の決意を御覧下さい。

第4話 黄巾の乱と劉備の決意

西暦184年、1月

貧困救済の活動を中心に展開していた民間布教団体『黄巾党』が、後漢王朝に対して兵を挙げた。

兵を挙げたと言うのもおかしいかもしれない。元々彼等は民間の布教団体であるため、軍事兵力を持っていないからである。

中央にいる者にとっては、ただの農民が鎌や鍬を持って襲ってくるというようなイメージしか持っていない。

実際そのイメージは間違っていない。

ただ、その数が多いのである。

優に百万を超える人々が鎌や鍬を持って襲ってくるのである。

数の暴力とは恐ろしい。

第二次世界大戦の日本は、連合国・・・主にアメリカだが・・・の数に敗れたと言っても大袈裟ではないだろう。

勿論、日本兵が弱いと言っているのではない。

現に、個々の戦闘では米兵を圧倒したことだってある。歩兵による夜間の敵陣地に対する夜襲で多くの戦果も挙げている。

だが、結局は数の猛威には敵わない。

考えてみて欲しい。

完全武装の訓練の行届いた官軍の兵士千人と、武装は貧弱、錬度は低い为数だけが多い黄巾軍の兵士1万人。

千人の兵士がどんなに頑張っても1万の人間を全員倒せるはずがない。

そもそも戦闘とは、普段の生活よりもずっと精神的・肉体的にも消耗が激しいのである。

鎌や鍬だって斬られれば傷は出来るし殺す事だってできる。

つまり、結局は数がものをいう訳である。

話が大幅にずれるが、最近の子供達は『人は死なない』と考えている子もいるようである。

恐らくゲームの影響と考えられるが・・・まったく信じられない話である。

・・・話が大幅に脱線してしまった。

元に戻そう。

この時反乱を起こした黄巾党の兵力は、軽く見積もっても180万も超えていた。更に女子供・老人を加えると、その数は・・・

一方、討伐する側の官軍と言えば、地方に展開中の部隊も含めて約46万人・・・

しかも、その中で戦意のある部隊・人数は更に少ない。

こんな状況であつた。

もつとも、中央にいる皇帝やその取巻き達は、すぐに鎮圧できると考えていた。

相手はたかが武装した民衆・・・そう考えていた。

だが、それは現実を、状況を正しく認識していない。

この反乱が起こってから3ヶ月が経過した。

事態は收拾するどころか悪化の一途を辿っていた。

そんな中でも各地の郡の長官である太守が、様々形での鎮圧のための行動をしていた。

*この当時は、『後漢』という国の下に青洲・荊州などの『州』があり、その下に『郡』、さらにその下に『県』があつた。

例えば、集められるだけ兵を集めて鎮圧に向かう郡の太守もいれば、義勇軍を募る太守もいた。

もつとも、郡の太守といえども州の長官たる刺史の指揮下にはいざるをえない。

しかし、この当時力を持っていたのは州の長官たる刺史ではなく、郡を統べる太守の方であった。

さて・・・舞台は再び河北省【たく】県のある村のお宅に戻る。

そう・・・劉備の宅に戻るのだ。

『はっ！はっ！はあああ！！』

ガキーン！

『踏み込みが甘いつ！もっとしっかり踏み込むんだっ！』

剣の修行である。

今訓練しているのは、関羽と秀頼の二人である。

『でい、たあっ、せいっ！』

訓練を始めて2週間。

秀頼の剣の腕は、かなり上達していた。

飲み込みが早いのか、他にも槍や弓の訓練も2、3日前から始めてもいた。

武芸の達人たる関羽をもつてして、

『このまま一年間みっちり鍛えれば、一刀の元に大木を剣で切り倒す程の腕前になる』

．．と言わせる程のモノをもっている程であつた。

一方の千姫はと言えば、

『張飛ちゃん、それはあつち。あれがこつちだよ!』

『ううゝ。分かんないのだっ!これはどこに置けばいいのだっ!?』

．．どうやら立場逆転のようである。

張飛は半分涙目である（苦笑）

『張飛．．洪紀殿に迷惑を掛けるでない』

やれやれといった感じで盛大な溜息を漏らす劉備。

それを見て笑うしかない千姫と洪紀。

ホント、穏やかな時間である。

さて、先ほど登場した『洪紀』という人物について、簡単に説明しよう。

この人物は、劉備達が暮らしている村の近くにある市場で、都から

運んできた様々な物を売買する商人である。

そして、劉備達が護衛をする対象でもあった。

『はははっ。まあ落ち着いて下さい、劉備殿。賑やかでいいではないですか』

『申し訳ない。妹が迷惑をかけまして．．．』

いつもの調子で会話が進む。

ふと洪紀が手招きをして、劉備を店の奥につれていった。

『劉備殿．．．本当に行ってしまったのですか？』

『洪紀殿。私は天下万民の為にこの乱れた世を立て直したいのです。そのために我々は義勇軍となり、天下万民の為に称して非道なる行いを繰り返す黄巾党を打ち倒すべく戦うのです』

いつになく真剣な眼差しに、洪紀は一度小さく溜息をつき、それから微笑みを浮かべ、劉備に言った。

『出発は5日後でしたね？当日は私の家にお立ち寄り下さい。いい物を差し上げますよ』

それに劉備は頭を下げた。

すると．．．

ガッシャーーン

『きゃあーっ、張飛ちゃん大丈夫っ!?!』

『ううゝ、痛いのだあゝ!劉兄いに怒られるのだっ』

どうやら店は修羅場となした様子だ。

それを聞いて劉備は、盛大な溜息をついた後、洪紀にもう一度頭を下げた後、店の方に歩いていった。

―― 5日後 - - -

『いよいよ出発だねっ!劉兄い!』

元気いっぱい張飛は、やや小さめの鎧を身に着けて、腰には一振りの刀が挿してあった。

関羽も同じくやや小さめの動きやすさを重視した鎧を身に着け、腰には張飛と同じく一振りの刀が挿してあった。

この二人の刀は、洪紀の知り合いの鍛冶師に打たせたものであった。

そこへ、劉備が秀頼と千姫を伴ってやってきた。

秀頼はこの世界に現れた時に身に着けていた具足と刀を、千姫の方は劉備の母と最近仲良くなった近所の同年代の女友達と一緒に作った軽装の衣服を身に着けていた。

『二人ともついてきてくれ』

劉備の声に従い、関羽と張飛の二人を加えた五人は、洪紀の自宅に向かった。

『洪紀殿つ、参りましたぞっ！』

関羽の声の後に、洪紀が自宅から出てきた。

その後には、洪紀の二人の息子と洪紀のもとで働く下働きの者が数人、同じく大箱を抱えて出てきた。

『お待ちしておりましたぞ、劉備殿』

そう言つて洪紀は大箱の蓋を開けさせ、中身を劉備達に見せた。

『洪紀殿、これ等の武具はいつたい．．．？』

そう言つて秀頼が箱の中身を覗きこんだ。

『私からのせめてもの饞別です。どうかお使い下さい』

『関羽殿にはこれを』

すうつと差し出された大薙刀を関羽は受け取り、その重さと長さに驚きつつも、いとも簡単にソレを振り回してみせた。

『青龍偃月刀【鳳月】．．．お気にめしたようですね』

洪紀が笑顔で関羽を見つめている一方で、劉備達はそれぞれの武器を受け取っていた。

張飛には、自分の身長を上回る程の大きさを持つ巨大な矛・・・蛇矛【煉獄】・・・を受け取り、劉備は二振りの剣・・・雌雄一对の剣【四聖雷光】・・・を腰に挿していた。

一方の秀頼と千姫である。

秀頼は新たな刀を受け取っていた。

『これが、村雨【神威】ですか』

右手に握られた刀の刀身は、怪しい光を放っていた。

『これが私の武具・・・七星宝珠【水錬】なのですね』

そう呟いた千姫の手には、大きな弓が握られていた。

『いずれも天下に二つとない名品ばかりです。あなた方の武運を祈ります』

洪紀は深々と頭を下げて祈った。

それを見た劉備達五人も深く頭を下げ、洪紀の厚意に感謝した。

『では皆、行こうか。仲間が待つてるから』

そう掛け声をかけた秀頼に促され、五人は村の広場に向かった。

―― 広場 - - -

人数にしておよそ100人程であろうか。全員が何らかの武器を持ち、馬に跨って待っていた。主の到着を。

『劉備様。これで全員です』

一人の青年が劉備に報告した。

約100騎の騎馬隊が、一斉に劉備の周りに集まった。

そして、劉備が声が嘎れんばかりの勢いで兵に語りかけた。

『我々は、誇り高き義勇軍である。天下を乱す黄巾党を打ち破るため、我々は戦う。彼等は、天下の為と称して罪無き人を殺し、家を焼き、蛮行を重ねている。私はそれを許す事は出来ない。我々は【儀】の旗の下、世の乱れを正し、民を守るために私は戦う。皆のためと一緒に戦おうっ！！』

．．．一瞬の沈黙の後、大きな歓声が上がった。

関羽が先頭的位置につき、その後を20騎の騎兵が続く。

中軍の位置に大将たる劉備が位置につき、周りを複数の騎馬が囲む様に円陣を組む。

最後尾に、秀頼・千姫・張飛の三将が殿の位置につき、行軍の態勢を整える。

ゆつくりと義勇軍は村から出発した。

数はたった100騎の騎馬隊。

彼等は、ついに戦場に身を投じる事となった。

時がゆっくりと、しかし確実に動きだしたのだ。

第4話 黄巾の乱と劉備の決意（後書き）

ようやく黄巾の乱が始まります。先は長いですね。これから頑張
張って執筆しますので、応援よろしくお願いいたします。

第5話 江東の虎（前書き）

遅くなりました。今回の話は、劉備ではなく孫堅がメインとなります。それではスタートです。

第5話 江東の虎

劉備達が故郷を義勇軍を率いて出発する僅か3日前・・・

—— 揚州会稽群 ——

『策、少しは落ち着いたらどうだ？』

顎に無精ひげを生やした三十代前半の男が、なかなか凄みのある低い音程の声で自分の息子（長男）である孫策伯符に話し掛けた。

それに答えたのは、孫策伯符・・・後に『江東の小霸王』と呼ばれる青年であつた。

『父上つ、俺はいつでも出陣できますっ！！』

まだ血気盛んな若者である。

『若殿、戦は1人では出来ませんぞ』

『そうじゃよ若様。もう少しご辛抱下され』

『むうう・・・』

今孫策を諭したのは、孫策の守役を勤める韓当と、孫堅の旗本隊長を勤める祖茂である。

彼等の小言は、流石の孫策も苦手にしており、ただその小言が終わ

るのを待つばかりであった。

『まあまあ韓当よ、そこら辺にしておけ。それより、兵の数はどれくらい集まった？』

『はあ、凡そ二千弱かと．．．』

『ではその者達と、我が軍の兵を合わせれば、約五千人の軍になるな。ようやく軍らしくなってきたではないか』

元々、孫堅の出自については不明な点が多い。

若い頃は、血気盛ん（現在もだが）で、海賊退治などをやっていたと言われているが、一部では孫堅自身が海賊紛い或いは海賊を行っていたという説もある。

兎にも角にも名門の出でもなく、大きな財力がある訳でもない孫堅が軍（義勇軍）を作るには、やはり相当に難しい。

いや、軍を作る事自体は簡単だ。兵士が集まれば、それで軍（と呼べるモノは多少強引だが）は完成する。

難しいのは、その軍を『維持』していく事だ。

兎に角、ある程度戦力を持った軍隊を中・長期的に保有し続けるには、かなりのお金がかかる。

武具・食料はもとより、騎馬隊用の馬の維持や上級將校達に対する高額な給料等数えたらキリがない程である。

参考になるかは分らないが、現代の世界で原子力空母を保有している国は、アメリカとフランスの二ヶ国だけである。

勿論、三国志の時代と現代を単純に比較する事は出来ない。

ただ、軍を維持していくにはお金が掛かるのである。

話が長くなってしまったので元に戻そう。

五千の軍勢が揃ってから一週間程調練をし、今一度軍議を孫堅は開いた。

『集まった軍勢の練度も大分上がった様だな』

孫堅は開口一番にそう言った。

その表情からは随分と落ち着いた様子に見られた。

『はい。我が軍はいつでも進発出来ます』

祖茂が静かに答えた。

『しかし兵の中には、大した武器や鎧を持っていない物もおりますが？』

意見を述べたのは、韓当や祖茂と同じく孫堅の配下の方である黄蓋である。

黄蓋、韓当、祖茂そして今この場にいない程普の4名を『孫堅四天王』とも言つゝ。

現在程普は、新しく集まつてきた兵士の訓練の為に、出かけていた。

『鎧や武器などは敵から奪えばいい。問題は、兎に角兵士達の練度だ。此处を出発した後も練度を落とす訳にはいかない』

『それは、行軍中も訓練を続けるという訳ですか？』

『その通りだ、黄蓋。我等はただ黄巾の賊軍を討つだけでなく、世に孫軍ありと知らしめねばならん。その為に、無様な事は出来んだ！』

元々、孫堅は忠誠心の厚い人物であつた。

史実では、董卓によって荒らされた洛陽にある歴代皇帝の陵墓の修復などを行っている。

しかし、一方でまた孫堅は熱血漢であり、（ある程度の）野心ももっていた。

例えば、孫堅は常に戦場では指揮官先頭を実践していたとも言われる。

もつとも指揮官先頭は、どちらかと言えばマイナス面の方が多い。

確かに指揮官が先頭に立つ事は、味方の士気を上げるという点では効果的であるが、逆に敵に狙われ易く討ち取られる可能性も多い。

また、本来は全体の指揮をとらねばならないが、前線に突入したは全体の戦況を即座に判断し他の部隊に的確な指示を出すというのも

難しくなる。

・・・話がそれた。

史実での孫堅の死因は、袁術と手を組んだ後に襄陽の劉表を攻めた時に、襄陽の城を攻囲中に一人でいたところを、流れ矢に当たって亡くなった（戦死した）。

この物語ではどうなるだろうか・・・

孫堅達『孫義勇軍』は揚州会稽郡を、全軍を率いて出陣した。

『父上つ、兵の数は日に日に増えております！！このままいけば、洛陽に着くころには一万の軍となるのも夢ではありません！』

孫策が笑顔を浮かべながら話しかけてきた。

孫堅はそれを聞き、

『策つ、戦は兵の数は確かに大事だが、質を伴わなければその力は半減してしまう。例え一万人の兵になろうとも、当てになるのは中核の五千人だという事を、しっかり憶えておけ』

・・・と多少顔の硬い表情を崩しながら、孫策に話した。

それを聞いた孫策は、なる程と小さく声に出し、父の言った事を理解した。

さらに孫堅は、

『後ついでだが・・・我々は洛陽を目指して行軍している訳ではないぞ、策』

と語った。

それは孫策にとって予想外だったらしく、孫策は目を丸くしていた。それを見た孫堅は、笑いながら孫策の疑問に答えた。

『一々天子様の所に行き、出陣の許可を取っている暇なんてないぞ策つ。戦果を挙げて、既成事実を作ってしまったえば、後は天子様の取り巻きたる【阿保】の十常侍に多少の金をバラまけば、大丈夫だ』

と孫策に言つて豪快に笑いだす孫堅。

『と言う訳だ策！！我らはこのまま荊州の襄陽に向かい、襄陽城を包囲している賊軍と戦う』

襄陽はどちらかと言えば、守りに強い城と言うより平時の太守の城と言える城で、守りはさほど強くは無い。

現在城の守備には、洛陽から派遣された朱儁將軍に率いられた二万の兵力で籠城していたが、その城を攻囲していたのは、黄巾軍の主力軍八万を率いた張梁（黄巾賊の首領である張角の弟）であつた。

彼は、【人公將軍】と自称し、黄巾賊の主力を率いて各地を転戦。

つい一週間ばかり前に、洛陽を出陣した官軍の將軍である皇甫嵩將軍の軍勢と荊州の新野と呼ばれる場所で戦い、撃破しそのまま南下して襄陽一帯を守備していた朱儁軍といま一度激突し、朱儁軍を打ち破った。

そして、朱儁の軍が退却した襄陽の城を、包囲していたのである。『黄巾軍の兵力は八万．．．厳しい戦いにはなる。しかし、私には

秘策がある。凄い秘策がな．．．」

何やら思わせぶりな言葉の呟く孫堅。

だが、その言葉は行軍中の足音に掻き消されて孫策の耳には聞こえなかった。

故に孫策は、孫堅が言っていた黄巾軍との兵力差を聞かされたただ漠然とした不安を感じていた。

しかし、そんな孫策の漠然とした不安は、実際に黄巾軍と戦った時に一掃される事を、孫策自身は未だ知らない。

江東の虎とその息子が戦乱に身を投じた時、歴史の歩みがその速さを加速させる。

時代が戦乱を、戦いを欲していた．．．

第5話 江東の虎（後書き）

如何でしたでしょうか？今後ともよろしくお願いいたします。

第6話 荊州に孫堅あり（前書き）

孫堅の戦いが始まる・・・

第6話 荊州に孫堅あり

ある一人の男が、孫堅軍の後を約8千の軍勢を率いて追っていた。

その軍勢は装備も比較的揃っていて、騎馬隊の数も多かった。

その8千の軍勢の先頭には

「周」の旗と、もう一つ

「長」の文字が見える。

そう、一人は孫策の盟友で義兄弟の『周瑜公瑾』その人である。

そしてもう一人・・・

周瑜と共に先頭を突っ走っているのが、『長宗我部盛親』である。

『なあ周瑜殿・・・若様は元気かい？』

気さくな態度で接してくれる、頼れる兄貴といった感じの好青年である。

『伯符殿は相変わらずさ・・・。少しは大人しく書を読めばいいのに・・・。』

『ははっ。いいじゃないか周瑜殿。いざ戦になれば、そんなモノ役にたたんさ・・・。武人として必要なのは、兎に角生き残る事と最後まで諦めぬ心だ』

『石田三成殿や後藤基次殿のように．．．ですか？』

『そうだ．．．彼の者達は、最後まで諦める事なく戦った。最後まで望みを捨てることなく戦った。彼等の生きた姿が、今の私を作っていると言っても差支えない』

『私は．．．』

『まっ、考え方は人それぞれ。百人の人間がいれば、その百人が皆同じ考えを持っている訳ではないだろう。だから私は自分の生き方を、他人に押し付けるつもりは毛頭ない』

『私には未だ．．．』

『周喻殿．．．時間はまだたっぷりある。人生は長いだから、落ち着いてもう一度よく考えるのだ．．．』

『はい。今は、孫堅様に追いつく事だけを考えましょう』

孫堅達を追いかけて、周喻・長宗我部盛親に率いられた部隊は、荊州へ向けてひた走っていた。

『韓当、全軍に突撃態勢を整えさせる』

『はっ』

『策、まずは襄陽の城に駆け込む事だけを考える』

『はいっ！』

現在孫堅軍は、襄陽城に籠城している朱儁將軍率いる二万の軍勢を包囲している黄巾賊の張梁率いる八万の軍勢に、奇襲を仕掛けようとしていた。

ただし、その包囲している軍に奇襲を仕掛けようとしているのは、たったの五千である。

単純な兵力差で考えれば、戦力比は1対16と圧倒的に不利である。だが、孫堅には勝機があった。

孫堅は籠城中の二万を有効に使うつもりであった。

『準備できましたぞ、孫堅様』

『御苦労、程普』

『では、参りますか。孫堅様？』

『勿論！』

孫堅は馬に跨り、己の愛剣『中烈 天狼剣』を鞘から抜き放ち、高く頭上に掲げ、叫んだ。

『我が元に集いし勇者たちよ。敵は目の前にいる。皇帝に逆らいし逆賊を我と共に討ち滅ぼそうぞつ！！』

『『『オオオオーーッ！！』』』

孫堅は旗本の二百騎を含んだ騎馬隊1200騎の先頭に立ち、突撃した。

彼等の突撃は苛烈を極めた。

多くの敵兵を薙ぎ倒しながら進む彼等の姿は、まさか新手に襲撃されると思わなかった黄巾賊の各部隊に大きな衝撃を与えた。

孫堅は、二度の突撃を行って引き揚げたが、黄巾賊側の損害の多さがそれを物語っていた。

襄陽を攻め立てていた黄巾軍八万の内、孫堅軍の奇襲に応戦できたのは、たったの一万数千。

黄巾軍はたった二度の突撃で、約七千近くの兵を失ったのである。

対する孫堅軍は、戦死者35人、負傷者170人弱と合わせて200人の損害である。

僅か五千の兵が挙げた戦果としては、ずば抜けた戦果を挙げた。

だが、孫堅は冷静であった。

たったの二度の突撃で、戦闘を切り上げてしまったからである。

もともと、時間を掛ければ敵に与える損害を増やす事が出来るが、それは同時に自軍の被害も増える事を意味する。

孫堅は飽くまでも目先の勝利ではなく、その先を睨んで動いていた。孫堅が黄巾賊に奇襲を仕掛けてから3日後、官軍側に動きがあった。

援軍として派遣された一万五千の兵力が城に入城したのである。

しかし何故官軍の援兵は、すんなりと城に入城できたのであろうか？

答えは、3日前に孫堅軍によって行われた黄巾賊への奇襲攻撃に係っていた。

この時孫堅は、騎馬隊を率いて一度だけ敵の本陣・・・つまり敵将張梁のすぐ傍まで近づき、矢を放ったのである。

それが偶然にも張梁の右肩に刺さったのである。

この時の矢傷により高熱を発した張梁は、満足に指揮を執れず、入城する官軍の援兵に有効な攻撃が出来なかった。

またこの時も孫堅軍が、阻止しようとする黄巾軍に再び突撃する構えをしたため、動くに動けない状態になってしまったのである。

これで両軍の戦力比は、全体で約1対2となった。

そしてさらに2日程たったころ、孫堅待望の援軍が到着した。周喻率いる8千の軍勢の到着である。

『孫堅様、周公瑾ただ今到着いたしました』

『御苦労だったな、周喻』

『はっ！』

周瑜は頭を垂れ、そして孫堅の許可を得て、退室した。

『ふむ・・・長宗我部殿、御苦勞であつたな。あのような若者の面倒を見るのは、あれだったかな?』

『とんでもないっ！周瑜殿は、優れたお方です。その力は、必ず殿の御子息である孫策様の力となりましょう』

『ふむ・・・その方にそう言ってもらえると、私としても安心していられる。これからも頼むぞっ!』

『勿論で御座います』

襄陽の戦いは、孫堅軍の援軍が到着したことにより、大きく動いた。

城内に約三万、城外に一万三千の兵力を擁する官軍側は、挟撃される位置にある黄巾賊に優位に立ち始めた。

そして孫堅軍が黄巾軍に奇襲を仕掛けてから10日後には、官軍側による攻囲軍への総攻撃が行われた。

合図はやはり孫堅軍の黄巾賊への攻撃であつた。

黄巾賊は、先の孫堅軍による攻撃を受けて以来士気の低下に悩まされており、兵士の集団での逃亡も起きていた程であつた。

結局、襄陽城を巡る戦いは官軍の勝利という形で終わった。

この戦いで孫堅は大いに名声を挙げ、他の官軍の部隊にもちらほら噂に上るようになった。

そして彼の噂は、洛陽にいる皇帝の耳にも入り、後に彼が官位を得る切っ掛けとまるのである。

第6話 荊州に孫堅あり（後書き）

如何でしょうか？今回の話では、大阪の陣でも活躍した四国の戦国大名『長宗我部 盛親』を孫堅軍の武将という形で登場させました。次回はいつたい誰が登場するでしょうか？次話ご期待下さい。

第7話 猛虎との再会（前書き）

今回のお話は、劉備達の話です。ある戦国武将が登場します。ご期待下さい。

第7話 猛虎との再会

孫堅が襄陽で黄巾賊に大勝した頃、義勇軍大将の劉備とその仲間の秀頼達は、冀州の名もない小さな町に差し掛かった。

小さい町で、どこら辺にでもあるような田舎ののどかな町であった。

『よし、一旦休憩をとろうか』

『うむ。それがいいでしょう』

『では関羽、頼まれてくれるな？』

『承知つかまつった』

関羽は頷くやいなや、馬首をめぐらし、町の方へ駆けていった。

『のどかな場所だね』

『それで御座いますね』

秀頼と千姫の二人もこののどかな景色には、心がなごまずにはいれなかった。

故郷を出立してから早1週間。

すでに何度も野党の群や黄巾賊と戦っており、多少は名が売れるよ

うになっていた。

特に関羽と張飛の二人は凄まじく、二人で50人いた野党を殲滅したことすらあった。

秀頼も最初は人を切る事に戸惑っていたが、次第にいい意味でも悪い意味でも

「慣れて」しまい、剣の腕も着実に上達していた。

千姫は、弓を用いた戦働きはもとより、野営時の料理など戦以外の事でも大活躍であった。

そしてこの町で二人は、思いもかけない人物と再開する事となる。

『おや・・・関羽殿が戻ってこられましたな』

秀頼が言うように、関羽が町から戻ってきた。

『兄上、町の長は我々を受け入れてくれるようです。参りましょう』

『そうか・・・よし。皆つ、今日はあの町で休もう。それでは行くか』

『『『『おうっ！！！』』』』

彼等義勇軍が町に着いた時、一人の武者が酒屋の中からその様子を見ていた。

そしてその男は、ある二人の見知った顔を発見し、声を掛けようとしたが・・・

町の人々が義勇軍の周りに集まってしまい、声を掛ける事が出来なかった。

劉備達義勇軍は、町の各所にある宿を格安で借り受け、そこで兵達を休ませた。

久方のちゃんとした飯を食えるとあって、兵達の顔は明るかった。

だが・・・

『黄巾賊が来たぞーっ！！』

『黄巾賊だぁー！！！！』

町を、千足らずの黄巾賊が襲撃してきたのだ。

当然、劉備達義勇軍も迎撃を行ったわけだが、敵の数が多い事に加えて町の住人を守らなければならず、兵を分散させた為に効果的な迎撃が出来なかった。

それは関羽や張飛のような豪傑をもってしても難しかった。

そんな中、ひとり黄巾賊の首魁を目指して突き進む男・・・否、武者がいた。

『たぁぁぁーっ！！』

ぶしゅーっ

『げああっ！』

また一人の黄巾賊が、彼の刀に切られて物言わぬ骸となった。

すでに彼の歩いてきた道のりには、多くの死体が転がっていた。

その多くが黄巾賊であつたが、よく見ればその死体の中に赤子を抱えた母親らしき女性もいれば、60を超えたであろう年寄りの姿も見受けられた。

『てっ、てめえ、何もんだっ』

『私か？貴様らのような下賤な輩に名乗る名など持ち合わせてなどいないっ！』

その迫力ある口ぶりに、多少なりとも腕に覚えがある輩は、一步も動けなくなってしまうた。

『だが、死ぬ前の手向けとして教えてもいいであろう。我が名は、立花宗茂なりっ。憶えておけーっ！』

言い終わると同時に宗茂は刀を構えて敵兵に向かって突撃した。

結局、黄巾賊の首魁は秀頼が討ち取り、生き残った黄巾兵は散り散りになって逃げた。

『・・・多くの罪なき人が犠牲になってしまった』

『死んだ人間が生き返る事はありません。大事なのは亡くなられた方々を忘れない事と、これからをどうするかですわ』

秀頼の呻きともとれる発言を、妻である千姫が厳しい口調で窘めた。

『ああ・・・そうであつたな。うん？あれは・・・』

千姫の言葉をすっかり胸に刻んで意を新たにした秀頼の目が、懐かしい人物の顔を見つけた。

犠牲になった人々を、町の中の一角にあつた墓地に埋葬していた宗茂に、近づいてくる人の足音が聞こえた。

しかし意にも解せず宗茂は、死者の弔いに神経を注いでいた。

秀頼と千姫の二人は、見知った男の背中を見て、一瞬声を掛けようと思ったが、それを思いとどまって目の前の男に倣うように死者に対して手を合わせた。

しばしの沈黙。

死者に対する弔いを終えた男が、ゆっくりと立ち上がって後ろにいた二人に向かい合つて口を開いた。

『お久しゅう御座います。秀頼様、奥方様。先程は申し訳御座いませんでした』

宗茂はかつての主である秀頼とその奥方である千姫に、膝まづいて

陳謝した。

『顔を上げて下さい、宗茂殿。我々もあなたの弔いの時を邪魔して済まないと思っっているのだから』

秀頼が頭を下げ、千姫も同じく頭を下げた。

『秀頼様、頭を上げて下さい。あなた様は我が主。臣下に頭を下げるなどしてはいけません』

『しかし・・・宗茂も承知であろうと思うが、ここは我々が生きた世界ではない。それでもそなたは、私を主と仰ぐか？』

秀頼の問に、宗茂は当然とばかりに答える。

『私の命は、あの時に全て豊臣家・・・いえ、秀頼様に捧げております。それはこの世界でも変わりません』

力強い宗茂の決意を聞いた秀頼は、宗茂の手を取って深く感謝すると共に、新たな仲間の誕生に喜んだ。

- - -
そして - - -

『・・・という訳で、今回から新たに義勇軍に加わってくれる立花宗茂殿だ。

彼には本人たつての希望により、秀頼殿と千姫殿の護衛を任せる事となった。よろしく頼む』

言っなり劉備が宗茂の手を取って握手した。

宗茂はそれを笑顔で応え、義勇軍に加わった。

関羽、張飛等義勇軍の面々も拍手で迎え、新たな力強い仲間の参加に喜んだ。

義勇軍の面々も、昨夜の宗茂の活躍を見ていたため、彼の技量に疑問を持つものはいなかった。

『義』の旗を掲げ、天下万民の為に戦う義勇軍に、同じく『義』に厚い頼れる英傑が加わった瞬間であった。

第7話 猛虎との再会（後書き）

如何でしたでしょうか？次話から前書きで、戦国武将の紹介等を同時に行いたいと思います。次話以降もお楽しみに。それでは。

第8話 日の本一の兵と、天下の名宰相（前書き）

どうも、クラウドです。

長期に及ぶ中断の末、第8話を投稿いたします。

第8話 日の本一の兵と、天下の名宰相

冀州にある一際大きく賑やかな都市… & a m p ; # 3 7 1 7 2 ;

劉備達一行は今、この都市に来ていた。

幽州を出てからすでに30を超える黄巾賊討伐の戦いに参加し、多くの戦果を挙げてきた。

すでに名の知れた義勇軍として、河北一帯では有名になっていた。

そんな彼等義勇軍の規模は、すでに千人近い規模に膨れ上がってきており、中々日々を暮らすのも大変な規模になってきたのだ。

『劉備殿。僅かこれほどの間に、こんなにも仲間が増えるとは思いませんでしたな』

秀頼が笑いながら劉備に話しかけてきた。

『そうだな… 故郷を出発してから僅かの間に、これほどの規模になるとは正直思いもせなんだ』

劉備も苦笑した。

兵が増える事は、それだけ戦力が増える事でもあるが、良い事ばかりではない。

まず第一に食糧などの物資の必要量が増えるのである。

他にも、規模が大きければ兵士の質にもバラつきが出てくるし、色々問題も増えるのである。

そんな時…

『劉備ではないか！元気にしていたか？』

『これは公孫讚さまではないですか、お久しぶりです』

劉備は突然の旧友との再会に、驚きながらも喜びの表情で答えた。

『何、昔のように伯姉さんとも呼んでくれ。お前も元気そうだなによりだ』

『いや…さすがに衆人環視の前で伯姉さんは…』

『相変わらずだな、劉備は』

公孫讚は、ハハハッと笑う。

そう…目の前に現れたのは、劉備が廬植門下で学んでいた時の友人である公孫讚であったのだが…彼は男性ではなく女性であった。

廬植門下であった頃から類まれな美貌と容姿を持っていた彼女は、門下生の中のアイドル的存在であった。

『公孫讚さまはここで何をしておられるのですか？』

『まったく…現在は都の天子様にお仕えする身だ。私には現在、この冀州で暴れている黄巾賊の討伐をしている』

『そうでしたか…』

『お前の名は、洛陽でも売れているぞ？義に厚い男だな』

ハハハッと公孫讃が笑う。

『そうですか…』

劉備もそれを聞いて苦笑する。

『所で劉備、今は暇か？』

『ええ、外に仲間を待たせておりますが…基本的には』

『なら、私の所に来ないか？一時的とはいえ、お前達の面倒も見れるぞ？』

『そうですね…』

『何、すぐに決める必要は無い。私はこの都市の駐屯所にいる。1週間ほどだ。この地にいるのは』

『出陣ですか？』

『そうだ。黄巾賊の主力が、近々動く。それを我々が討つのだ』

『我々…ですか？』

『そうだ。我々だ』

『そうですか…分かりました。今晚、仲間を連れてお邪魔いたします』

『そうかつ！楽しみに待っているぞっ！！』

『はい。それではまた後で』

『うむ。ではまた後で』

そうして劉備達は、公孫讃達と別れて仲間の元に戻った。

義勇軍の仲間の元に戻った劉備達であったが、彼等の目に映ったモノは、如何にも派手な色…真紅の色に染まった鎧と旗指物を身に付けた凡そ500人の武者と、その武者を率いる歳若い少年の姿であった。

そんな彼等を見た秀頼と千姫の二人は、驚いた様子を示してこう叫んだ。

『信繁殿（様）！！』

二人の声が届いたのか、真紅の鎧を身に付けた若い武者の男が、かつて命を捧げた主君とその奥方の姿を見た彼は、泣き崩れそうな顔になった。

『…殿、お久しゅう御座います。真田信繁に御座ります』

真田幸村…もとい真田信繁は、目に涙を浮かべながらかつての自分の主である立派な青年…豊臣秀頼に語りかけた。

『信繁…また会えた事を、私は嬉しく思うぞ』

『はい…某も嬉しゅう御座います。奥方様も、元気そうで何よりで御座います』

『真田殿も、元気そうで何よりですわ』

秀頼・千姫共に、久しぶりの旧友に会ったかのように、楽しげに会話していた。

その後、現在の状況を近従のような仕事もしていた護衛役の立花宗茂も交えて話し合い、さらには劉備達も加わって、真田信繁一行の今後を話し合った。

『どうだろうか…真田殿。我々と共に、この国を救うために共に戦ってはくれないか？』

『劉備様、私も武士の端くれ。国も時代も違えど、民が苦しんでいるのを黙って見過ごす事など出来ません。喜んで共に戦いましょう』

『おおつ。本当ですか！？有難う。本当に有難う！』

『勿論です。ただし…』

『何ですか？何か問題でも…？』

『我が主は、ここに居らせられる秀頼様です。さすれば、某は劉備様と共に戦う秀頼様の下で、この国の為、民の為に戦う。そうお考えください…』

『なにやらややこしくなってしまうな…』

『申し訳御座いません…しかし、そこだけは某も譲れませぬ。どうかご容赦を…』

これには、劉備達一行も苦笑せざるを得なかった。

結局、真田軍は秀頼直属の部隊と言う形で劉備達義勇軍に加わった。

その日の夕刻、昼に公孫讃と交わした約束通り、劉備達義勇軍は公孫讃軍の陣にお邪魔していた。

『おお、待っていたぞ劉備！よく来てくれたな』

『お邪魔いたしますよ、公孫讃様』

『はははっ、そう硬くなるな劉備。今は私的な場だ、様や殿といった事を言う必要は無い』

そう言つてニカツと笑った公孫讃の顔を、劉備は懐かしい思いで見ている。

劉備達が、公孫讃に連れられて一番大きな天幕の中に入った所には、一人の端正な顔をした若者が、直立不動の姿勢で待ち構えた。

しかし、その男の顔は、心なし笑っているように思えた。

そして劉備達一行の一人である秀頼には、その男に見覚えがあった。

『直江山城…』

『お久しぶりで御座います、秀頼様…』

この男、直江山城守兼続が、秀頼の目の前にいたのだ。

第8話 日の本一の兵と、天下の名宰相（後書き）

本作を愛読された読者の皆様、長い中断の方：申し訳ありません。

作者は現在、多忙と他の作品に重点を置いているという理由により、本作の今後の投稿も不定期となる公算が「大」であります。

本作をご愛読の読者の皆様には、実に申し訳ない事なのですが、宜しくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3703g/>

三国志 【豊臣の血は消えず】

2010年10月14日12時08分発行